
幼児教育専攻 山下真衣香 3回生

帰国渡日児童生徒つながる会

第1章 プロジェクトの概要など

1. プロジェクトの名称、目的など

現在京都府内の学校には、国際結婚の家庭に生まれた子どもや、在日外国人、帰国児童生徒などさまざまな形で「外国につながる児童生徒」たちが点在している。そのような子どもたちは、言葉や文化が違うということから、他の日本人の子どもたちとのコミュニケーションが上手いかず、クラスで孤立してしまうことも多いようである。また、それぞれの学校に「外国につながる児童生徒」が少ないことも多い。そのため、悩みを相談できる人がおらず、一人で抱え込んでしまうこともある。つながる会は、同じ境遇にある子どもたち同士が出会い、共に活動する場を提供している。そして、その場を通じて彼らが同じようなことに悩んでいる人がいるのだと知り、そんな悩みを分かち合える友達を得ること、また一人一人が持つ個性を尊重し、自分自身や自分のルーツに自信を持ち、彼ら自身がその国の言語や文化を大切にできるようになることを目的として2008年度から e-project での支援を受けながら活動し、今年度で10年目を迎えた。

今年度は外国にルーツをもつスタッフも加わり、帰国渡日児童生徒がどのような悩みを抱えているのか、学習面ではどういうところに難しさを感じるのか話し合い、これまで以上に理解を深めてきた。

また、学校を卒業した後も彼らの個性が尊重され、活躍できるような社会になることを目指し、ラジオ出演などのアドボカシー活動も行っている。

2. 代表者および構成員

・代表者

・構成員

教育学専攻 妹尾花菜子 4回生

国語領域専攻 山下舞子 4回生

国語領域専攻 坂本有里紗 3回生

国語領域専攻 村上舞 3回生

国語領域専攻 鳴橋杏里 2回生

国語領域専攻 岸田茉莉 2回生

国語領域専攻 渡辺優 2回生

教育学専攻 石井千晴 2回生

理科領域専攻 鈴木タリネミツエ 2回生

音楽領域専攻 榎木蘭直子 2回生

3. 助言教員

浜田麻里先生 (国文学科)

第2章 内容や実施経過など

1. 実施経過

4月 新入生勧誘

5月 夏の活動を企画

6月 夏の活動内容検討

7月 夏の活動内容

夏の活動準備

8月 大学において夏の勉強会を実施

プラムイン城陽において夏の活実施

11月 冬の活動内容検討、決定

12月 ラジオ出演

大学において冬の活動実施

2. 実施内容

(1) たけのこ会

場所：京都市地域多文化交流

ネットワークサロン

内容

たけのこ会では京都市教育委員会の広報の協力もあり、月に一度フィリピン人団体「京都パグアサフィリピン人コミュニティ」と連携し、学習支援を行っている。対象は主にフィリピンにルーツを持つ小中学生・高校生で、パグアサの方たちが子どもたち一人一人に声をかけ集めてくださっている。14時か

ら 16 時半までは、それぞれの子どもたちが持ってきた課題（学校の宿題、教科書、問題集等）をすすめる。その間、随時学生がフォローに入り、個別に指導を行う。スタッフは、小学生と漢字の宿題をしたり、九九を覚えたりし、休憩時間には一緒に遊んだりした。

また 9 月には保護者の方々の関心を高めるためにも、お楽しみ会を行った。私たちスタッフも招待していただき、数名のスタッフが参加させていただいた。

(2) 夏の活動

日時：2017 年 8 月 13 日、17 日

場所：13 日 京都教育大学

17 日 プラムイン城陽

内容

13 日には勉強会とレクリエーション、17 日の野外調理の計画・準備、17 日には野外調理、レクリエーションを行い、基本的に子ども達とスタッフは、両日ともに活動に参加した。

また夏の活動や冬の活動での広報は、京都市内は教育委員会から、その他の京都府内には学校宛に案内を送っている。一度来てくれた子には直接郵送で案内を送り、子どもたちを集めている。

<13 日>

スタッフは 8 時 30 分に集合し、9 時すぎに JR 藤森、京阪墨染、大学正門に子どもたちを迎えに行った。子ども達と一緒に大学へ向かい、そこから小休憩での自己紹介を挟んで 12 時まで勉強会を行った。子どもたちは学校で出された夏休みの課題を主に勉強しており、随時スタッフが子どもたちに声をかけながらフォローを行った。来日したばかりで、日本語が難しい男児が漢字の書き順や読み方を練習している際にはスタッフが実際に書いたり、音読み、訓読みなどの具体例を挙げながら説明したりする姿があった。その後、大学の購買や学食を利用し昼食をとって、レクリエーションを行った。最近では男の子の参加が多く、前回の活動の際、身体を動かすレクリエーションがしたい、という声が多かったのでした。スタッフも一緒に参加しチーム

戦を行い、互いを応援し合う姿が見られ、白熱したレクリエーションになった。14 時 30 分頃、教室に戻り、小休憩を取って自己紹介を行った後 17 日の野外調理の計画を行った。以前、調理したものが口に合わない子どもがいたので、子どもたちと話し合い、どんなものを作りたいか、どんなものを食べたいか意見を出し合った。話し合いの結果、牛丼、魚の塩焼き、ピザ、フルーツポンチを作ることになった。最後に振り返りシートを記入し、迎えに行ったところまでそれぞれスタッフが見送りに行き、解散した。その後のスタッフの反省会で、宗教の関係で牛肉が食べられない子どもがいることに気づき、牛丼は鶏丼に変更することになった。

<17 日>

スタッフは 8 時 30 分に大学に集合し、打ち合わせを行った。9 時に JR 藤森、京阪墨染に子どもたちを迎えに行った。

大学に戻り、貸切バスでプラムイン城陽まで移動した。移動中には、風船に貼ったセロハンテープを剥がす速さを競うゲームなど、子ども達がバス酔いせずに楽しめるようなレクリエーションを行った。11 時頃にプラムイン城陽に到着。調理器具や材料を配布し、調理器具を使う際の注意などを行った上で、調理を開始した。野外活動経験が豊富なスタッフが少なく、火をおこすのに手間取った。しかし、子どもたちは楽しそうで、火が点いたことを喜んだり、隣のかまどに火を分けたり、コツを教え合う姿が見られた。12 時 40 分頃すべての調理が終わり、食べ始めた。その後、アスレチックで遊び、スイカ割りを行った。13 日同様、男の子たちの参加が多かったので初めての経験の子どももいたが、とても盛り上がった。最後に振り返りシートを記入し、貸切バスで京都教育大学に戻った。15 時 30 分頃、到着し、それぞれのスタッフが迎えに行ったところまで送り届け、解散した。

(3) KBS でのラジオ出演

日時：2017 年 12 月 17 日

内容

KBS 京都ラジオ開局記念特番「サンクス 66」
京都府 Presents「明日の共生社会へおくる今日の人

権メッセージ」公開生放送に出演しアドボカシー活動を行った。少しでも多くの人に彼らの境遇や生きづらさを知ってもらうことで、外国にルーツを持つ子どもたちが学校を卒業し、社会に出た時、社会全体とつながり、各々の個性が尊重され、活躍できるような社会になるのではないかと考えている。ラジオでは、子どもたちのルーツが多様化してきている理由や社会的背景、当然に思われることが帰国渡日児童生徒にとっては難しい場合があるということ、具体例を挙げながら伝えた。

(4) 冬の活動

日時：2017年12月26日

場所：京都教育大学

内容

スタッフは朝8時30分に集合し、子どもたちの情報の共有、勉強会の準備を行った。9時までに、子どもたちの集合場所である大学正門・大学西門・京阪墨染・JR藤森に向かった。

到着後順番に名前を確認するとともに、テープを配布し名前を書いてもらい、名札としてつけてもらった。スタッフも同様に、呼んでもらいたい名前を書いて貼っておいた。

準備ができた子どもからいくつかのテーブルに分かれ、各自持参した勉強道具で勉強を始めた。スタッフがわからないところを教えたり勉強が進められるよう指導したりした。社会や理科の宿題をした時問題文に出てくる漢字が読めなかったり、言葉の意味がわからなかったりして、つまづいていることがあった。問題文を読み上げたり言葉の意味を説明したりすれば答えられる(ところもある)ので丁寧な指導が必要だと感じた。勉強時間が長く、普段のノルマを大幅に上回る量をこなすことができた。また、勉強会の小休憩では夏の活動同様、自分の名前、学校、出身地自慢を紹介し合った。ルーツのある国について話す子どもや今住んでいる所の話をする子どももいた。

12時頃、大学の学食で昼食をとった。その後、13時から中庭でレクリエーションをした。はないちもんめや、夏の活動で好評だったしっぽ取りを行った。とても寒い中だったが、上着を脱ぎ、汗をかきながら走り回る様子が見られた。経費で購入したカラフ

ルな襷を使うことで、チームが明確になり、よりゲームを楽しむことができた。14時頃体育館に移動し、ペットボトルボーリングやサッカーを行った。スポーツが好きな子どもが多かったので、どのレクリエーションも盛り上がり、十分に身体を動かすことができた。

第3章 結果や成果など

1. たけのこ会

たけのこ会では、中学生の頃から勉強会に参加してくれていた子が、高校生になってもまだ参加してくれている。たけのこ会に、中学生時から高校生まで継続的に参加してくれることによって、スタッフとしては、外国にルーツを持つ子どもたちが進路選択や学校生活においてどのような壁にぶつかり、どのように乗り越えていくのかを知ることができた。参加者の子どもとしては、同じフィリピンにルーツを持つ同年代の子どもとつながることができ、進路や学校生活での悩みを共有することができるのではないかと考えられる。また、参加者の子どもが私達スタッフに学校生活の楽しさや悩みについて色々な話をしてくれたことから、彼女らが大学生のスタッフと話すことで、ふさぎこんでいた気分を晴らすことや、悩みの解決の糸口を見つけることができていくかもしれない。

2. 夏の活動

勉強会の小休憩で、名前、学校、学年に加えて、出身地自慢の自己紹介を行った。これまでは出身地自慢をしたことはなく初めての試みだった。スタッフが自分の出身県を紹介し、流れを作ることで話しやすい流れを作った。中には今住んでいる所の話をする子どももいたが、自分のルーツのある国の好きなところや日本と違うところを自信をもって紹介する姿が見られた。学年の違いがあったり、学校が違ったりする場合でも互いのルーツを知ると、その後の活動で距離が縮まる様子もあった。

野外調理では、13日勉強会での様子を参考にしながら、調理担当を子どもたちのルーツごとに分け、リーダーも決めた。年長の子どもが年下の子どもを

気にするなど勉強会だけでは作ることができない関わり場を作ることができたと思う。

3. KBSでのラジオ出演

言葉だけで伝えるのはとても難しかった。しかしラジオで情報を発信することで、より多くの人に帰国渡日児童、生徒について知ってもらえる機会になった。より一層のアドボカシー活動の必要性を改めて感じた。

4. 冬の活動

勉強会では、主に学校の冬休みの宿題に取り組んだ。理科など問題文に出てくる漢字の読み方や言葉の意味が分からず、つまづいている子どもが多かった。自ら「これどういう意味？」と聞くことができる子どももいるが、分からないところがあると集中が切れて友達に話しかけたり、ぼーっとしている子どもも見られた。そんな時、スタッフが「どこがわからん？」「これはどこのことかわかる？」など丁寧に支援していくことで勉強に身が入るようになり、個々に合わせた丁寧な指導の必要性を改めて強く感じた。

レクリエーションでは参加する子どもたちに合わせ、身体を動かすものを多く行った。子どもたちが自然に関わることができるチーム戦のしっぽ取りやはないちもんめを行ったのが良かったと思う。十分に身体を動かし、満足のいく時間を過ごすことができた。

第4章 まとめと反省、今後の展望など

1. つながる会

丁寧な指導が必要な子どもたちが集まる場であるにも関わらず、スタッフの参加が少ないことが多かった。何年も続けて来てくれる子もいるので、十分に丁寧な指導ができるよう、スタッフの確保に力を入れていきたい。そのためにも、学内でつながる会やたけのこ会の活動の認知度を上げ、活動に興味を持ってもらう必要があるだろう。

2. 夏の活動

子どもたちのリクエストに添い、野外調理をする

ことができたのは良かった。活動への意欲も高まり、片付けにも積極的に取り組もうとする姿が見られた。

反省として、17日の事前連絡をするべきだった。毎回活動の前には各家庭に活動日、集合場所、時間、持ち物の確認の電話をしている。13日の活動の際、17日の確認をして解散したので、大丈夫だろうと事前連絡をしなかった。しかし、うまく伝達できていない子どももいて、事前連絡の必要性を改めて感じた。

また、熱中症対策が不足していたように思う。活動を行ったのは8月中旬。日光を直接受けながら昼食をとることになった。事前に下見に行っていたが、想定不足だった。これらの反省を今後の活動に活かしていきたい。

3. KBSでのラジオ出演

出演に向けて、何を伝えたいのか、などをスタッフで入念に話し合った。改めて、つながる会が目指す方向性や意義、活動の中で自分が出会った子どもたちとのエピソードを共有した。このような機会はあまりなかったので、ラジオ出演に向けた準備が、スタッフにとって、活動への意欲向上につながったのではないかと考えている。

アドボカシー活動の必要性を改めて強く感じたので、2月のショッピングモールでの発表の準備にも力を入れていきたい。

4. 冬の活動

毎回参加してくれる子どもたちに加え、新規の子どもが多かった。夏の活動の際の反省を生かし、事前連絡をおこなったが、知らない番号からかかってくる電話に抵抗があるからか、なかなか電話に出てもらえず、事前連絡ができないこともあった。今後はチラシで活動のお知らせを送る際に、活動の数日前に電話確認での事前確認をします、という旨を伝えるなど工夫していきたい。

また、夏の活動の際に行ったしっぽ取りがとても盛り合ったので、冬の活動前に襷を経費で購入しチーム分けをしやすいようにした。冬の活動でもとても盛り上がったので今後も取り入れていきたい。

体育館でのレクリエーションは近年、あまり行っ

ていなかったが久しぶりに体育館を使った。中庭でしっぽ取りをしたとき、滑りやすく、転んでしまうことが何度かあったので早めに計画し、体育館を使える時は今後も利用していきたい。

5. 今後の展望

今年度はたけのこ会が京都市から「未来の京都まちづくり推進表彰」で表彰をしていただき、つながる会が2月に京都市の子ども若者はぐくみ局から「京都市はぐくみ憲章 大賞」を受賞させていただくことが決まった。私たちの活動も11年目が終わろうとしている中、先輩方から受け継ぎ、続けてきた活動が形となって評価された1年で、とてもうれしく思うとともにこれからも子どもたち同士がつながる場を作っていきたいと強く感じた。

また、継続して活動に参加してくれる子どもが多い一方で新規の子も多くなっているように感じる。帰国渡日児童生徒が同じ境遇にある子どもと出会う場を必要としていることを再確認するとともに、つながる会の需要はまだまだあるのだと感じた。将来的には需要がなくなることを目指していかなければいけないが、需要がある限り、このような場を大切に、それに並行したアドボカシー活動を行っていきたい。

また、勉強会やたけのこ会でのエピソードをスタッフ同士で共有するなど、より丁寧な支援を目指していき、スタッフ自身の教員としての資質の向上にもつなげられればと考える。